コーディネーターだより

令和7年3月
八代支援学校
文責 橋本

≪高等部の取組から≫

今回は、「職業」の取組の紹介です。先日、ミライム（職員間の連絡システム）の中に新聞エコ袋の紹介と先生方への発注書がありました。興味があったので、担当の先生に尋ねてみると高等部の校内実習で取り組んだ作業で、その作業が得意な生徒が継続して取り組んでいるということでした。添付された発注書には、必要数、納期を記入する欄があり、まさに「仕事」を感じました。このエコ袋ですが、高等部では、ゴミ箱の中に敷いておき、ゴミ出しの日にまとめて袋に入れて捨てるということでした。ゴミ箱が汚れないのはもちろんのこと、簡単にゴミ処理ができるとあって重宝してるということです。私も実物（写真：約25センチ×38センチ）を見ましたが、給食の時のゴミ入れにいいなと思いました。

取組の様子を聞く中で、日本理化学工業の大山会長の話を思い出しました。
『人間の究極の幸せは、「愛されること」「褒められること」「役に立つこと」「必要とされること」あとの3つは働くことで得られる。』というところです。

作る活動で終わるのではなく、担当の先生の工夫により、褒められる場があり、必要とされる場があり、役に立つ場があり、生徒の意欲を高め、卒業後の就労につながる学習と感じました。

＊日本理化学工業：黒板に書くチョークを作る会社で、昭和35年から知的障がい者雇用を始め、現在は、障がい者雇用率約70％だそうです。

《インクルーシブ教育について思うこと》

多くの方が「インクルーシブ教育」と言葉を聞かれたことがあるかと思います。皆さんは、インクルーシブ教育をどのように捉えていますか。2月27日の熊日新聞に『インクルーシブ教育「共に学ぶ」考えに溝』という記事が掲載されました。国連が意図するインクルーシブ教育と我が国の現状に隔たりがあるということでしょうか。私自身もインクルーシブ教育という言葉を使うのですが、今後日本がどのように進むのかはっきりした答えを見いだせてないところです。この機会に、インクルーシブ教育について考えてみることにしました。

2022年の国連の勧告では、我が国は「障がいのある子供の分離された特別支援教育が永続している」ということで、ただちに中止を求めるものでした。当時の文部科学大臣は「多様な学びのにおいて行われている特別支援教育を中止することは考えていない」という声明をを出されています。現在行われている教育は、分離教育には当たらないということだと思います。「同じ」か「分ける」のみで考えると、日本は遅れているという認識になってしまうかもしれません。新聞記事をみると将来、特別支援学校や特別支援学級がなくなり、一つの学級で一緒に学習すると受け取ってしまうことも考えられます。しかし、子供たちの状況をみると、必ずしも同じ場で一緒にということが当てはまらない場合もあります。「同じ」か「分ける」かで判断するのではなく、子供たちの障がいの程度や教育的ニーズによって多様な学びの場が準備され、それぞれの場で教育的ニーズに応じた適切な指導・支援が提供できるようにすることが今後私たちが目指すところと感じています。

コーディネーターとしても、「同じ場所で共に学ぶ」というインクルーシブ教育の理念を踏まえ、就学説明会や教育相談において、多様な学びの場や適正な就学の場の決定において参考となる情報提供をしていきたいと思います。